

歴史探訪

クラブ

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局3635
FAX 22局3811

田原のジョン万次郎たち 永久丸漂流の悲喜1

人気のある冒険物語に、漂流・遭難の物語があります。海洋や無人島で遭難した主人公たちが、未知の危機を乗り越え、勇気や友情を育みながら、生きる知恵や力をも身につけて成長していく姿は感動を与えます。物語としては胸躍るのですが、もし実際に自分がその立場になったら…。恐怖で一体どうなっていたでしょうか。

江戸時代の漂流民では、中浜（ジョン）万次郎、大黒屋光太夫が有名です。彼らは漂流の恐怖を乗り越え、

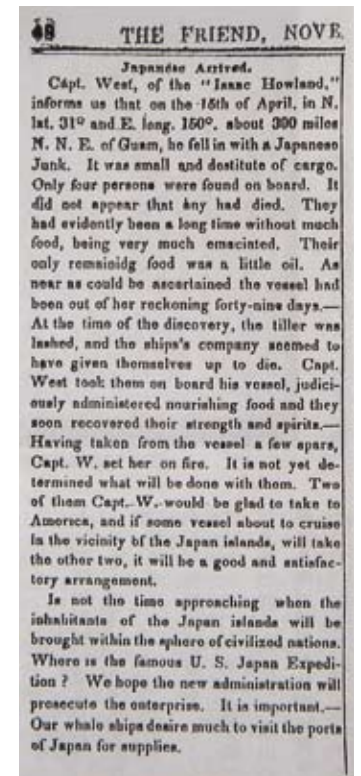
特に万次郎はアメリカに渡り、政治や文化、学問を学び、帰国後は開国の影の功労者の一人として活躍しました。江戸時代の田原にも、海洋を漂流した果てに、アメリカまでたどり着いた人たちがいたのでご紹介します。

現在の江比間町の伊藤与一の船は、嘉永4年（1851）12月26日、熊野灘で激しい風に遭い、85日間の漂流を経て、グアム島の北東約300海里で、アメリカの捕鯨船に救助されました。漂流した船は120石積で、名は永久丸でした。乗組員は沖船頭（船長）の岩吉（江比間村・66歳）、水主（船乗）の善吉（江比間村・40歳）と勇次郎（芹村・21歳）、作蔵（若見村・21歳）のちの白井勝蔵の4人です。漂流時には食料や水はあったのですが、やがて底をつきました。4人は雨水を飲み、朝露をなめ、船に寄るサメを捕まえ



▲作蔵(のちの白井勝蔵)

ては空腹やのどの渇きを満たしました。そして死の恐怖と闘いながら、救助されるその時を信じ続けました。弱気になった仲間たちを励ましたのが作蔵で、彼の気力がアメリカの捕鯨船の発見へとつながったのです。そして運よく4人は救助され、7カ月ほどアメリカの捕鯨船の水夫として働きました。太平洋を北上して北極圏まで進み、9月にはハワイに入港しました。ハワイでは彼らのことが新聞で紹介されています。捕鯨船の船主の考えで、妻子のある岩吉と善吉は先に帰国させ、若い作蔵と勇次郎は見聞を深めさせることになりました。南米南端のホーン岬経由で大西洋を北上し、ニュー・ベッドフォードに入港した作蔵と勇次郎はアメリカの地に立ったのです。そしてボストン、ニューヨークの大都市を汽車で訪れたのです。



▲フレンド紙の掲載記事(1852年11月)

彼ら4人を救助した船主は、手厚く面倒を見ています。そこには人道的な面はもちろん、アメリカのことを深く理解してもらおうとした狙いがあったのです。その根底には、当時日本が行っていた鎖国が影響していたのでしょうか。

※永久丸の漂流については、山田哲夫さん（田原町）著『風濤の果て』に詳細に書かれています。図書館でも借りることができますので、ぜひ一読ください。

(増山)

今月の「表紙」

▼桜や花しようぶ、野鳥など四季折々の自然を楽しむことができる初立池。撮影に出かけた日も、ウォーキングを楽しむ人や、しようぶ園で散策する親子連れの姿が見られました。そんな中、元気に走り回る犬も…。かわいいうんちゃんでも怖いと感ずる方もいるので、放さないでください。(O)

【表紙の写真】初立池のしようぶ園